

善光寺だより

胸を打つ講演

五月二十八日、恒例の身代り不動明王の大祭並びに大般若会法要が行われた。



講演される萩生田先生

午前十一時より善光寺不動殿において、佐藤俊明師を導師とする祈禱会の後、女優・萩生田千津子先生が講演された。

萩生田先生は、昭和五十八年八月、交通事故で首の骨を折り、頸髄損傷による全身麻痺で車椅子の身となつた。

必死のリハビリテーションにより、どうにか自力で車椅子には乗れるようになつたものの、医師から「再起不能」の宣告をされ、沈んでいたある日、作家・水上勉先生の訪問を受けた。

「世の中にクズはない。要らんものなど一つもない。声が残つてゐるじやないか」という水上先生の強い勧めにより、萩生田先生は「語り部」として復帰された。

肩から下の感覚は今も無く、肺も閉じ、腹筋も働いていないお体ではあるが、さまざまなお会いを大切に、感謝の心を失わず、前向きに生きていらっしやる萩生田先生のお話に、一同心

を打たれた。

育英会の洪さんが得度

育英会の第四回生、洪淳海さん（韓国）が五月十日、善光寺釈迦殿において得度した。

が五



供さんの得度式

式典は、曹洞宗龍光寺住職の佐藤俊明師を戒師として、善光寺関係者十数人の他、洪さんの友人二人が参列、厳粛に執り行われた。

洪さんは昭和六十年から六十三年にかけて東京大学大学院宗教学科に留学、最終年度になつて海外留学僧派遣育英会を知り、「中道実践の「正」観に関する一考察」と題する論文を提出、入選して第四回生となり給費を受けた。

四月、黒田理事長と佐藤常任理事が訪韓した際、洪さんが日頃考えていることを聞いた黒田理事長の、在家得度を受けては、という言葉に得度を決意したという。

安名（＝法名）は、入選論文の題名から「正」をとり、黒田理事長の道号「大圓」から一字を、佐藤師の名前から「明」を、そして本人の名前から「淳」をとり、「正圓明淳」との名が授与された。

奈良・信貴山で断食修行

された。

(掲載文は次のとおり)

黒田住職は、奈良県生駒郡の信貴山断食道場に籠もり、断食修行による肉体の浄化と精神の修養に専念した。

断食行は、生命と意識を整え回復させる自然の法則であると言われ、黒田住職も断食によつて、精神的にも肉体的にも爽やかな充実感を味わつてゐる。

育英会「文藝春秋」で紹介される

善光寺黒田住職が、二千五百の檀家に一口十円として一日三十円、年間一万円の布施をもらい、そのお金で「海外留学僧派遣育英会」の制度を発足させて六年目。この五年間で海外に派遣、又は受け入れた若き僧侶や学者は二十九人。毎年、世界に留学僧を派遣してゐる。「文藝春秋」六月号のグラビア二頁でこのことが大きく紹介

横浜市にある成寿山善光寺の「海外留学僧派遣育英会」が今年で六年目をむかえた。この制度の発案者は住職の黒田武志師（52・写真左）。若い頃にタイ、アメリカなどで修行・布教の旅をした黒田師は、自らの経験から、「世界の言葉を学び、理解してこそ、その国の人々の心を知ることができるもの。本当の平和はそこから生まれる」と、この制度を発足させた。とはいへ、一番問題だったのはその資金だった。

「二千五百のお檀家に、一食一口のご飯代十円として一日三十円、年間に一万円を施していくいただき、その金を育英資金にあてさせてもらっています」（黒田師）
　　というように檀家の理解と協力なしでは成り立たなかつた。

この五年間で海外に派遣、または受け入



れた若き僧侶や学者は二十八人。最初は、「はたして応募者がいるかと心配で胃が痛くなつた」。そうだが、いつさい宗派にこだわらないという寛容さもあつてか、年々希望者は増える一方だ。

今年の育英生は六人でうち三人はここにいる尼僧たち。曹洞宗の沖田玉英さん（33・右から二人目）はアメリカの禅センターで学び、韓国・曹溪宗の金秀娥さん（27・右）は東京大学大学院で如来藏思想を、陳永裕さん（37）は駒沢大学大学院で華嚴学を研究し、それぞれ文化交流に努めている。